東風

こち

発行・編集
コミセンだよ
広報委員会
責任者
松崎　茂

就任のあいさつ

多家良中央コミュニティ協議会会長

松崎　茂

私、去る六月の総会において、堀井前会長の後任に推挙され、多家良中央コミュニティ協議会会長に就任する事になりました。と申しましても、生まれついての浅学非才な者で、このような役職は全く不得手でございまして、果たしてどこまで町民の方々のご期待に添うことが出来るのだろうかと、不安材料ばかりでございます。ただ現在、他の地域に勝るとも劣らぬ、素晴らしいコミュニティーセンターを築き上げてこられた歴代会長並びに、諸先輩の方々の苦労と努力を省みる時、そのご功績の偉大さを改めて痛感すると同時に、課せられた責任の重大さに身の引き締まる思いでございます。今後はコミュニティ本来の趣旨目的に則り、当コミュニティのキャッチフレーズである「花と緑の文化の香り、愛が育む潤いの郷」にふさわしい環境作り町作りに、微力ながら頑張りたいと思っています。コミュニティの発展は、町民の世論の上に立脚した、健全なる運営が基本要件であるという理念の元に、諸事情を推進する所存でございますので、町民各位さまには、前会長同様のご指導とご支援を賜ります様、宜しくお願い申し上げます。終わりに町民の皆様方のご健勝とご多幸を祈念致しまして、会長就任の言葉と致します。平成一八年十月吉日

事務局就任のあいさつ

立川　啓二

このたび、多家良中央コミュニティ協議会事務局に就任致しました八多町の立川です。何も出来ませんが、皆様のコミセン活動の一助と成れれば幸いです。宜しくお願い致します。

さて昨年九月に「多家良町・八多町電話帳」が完成いたしました。両町協議会、実行組および編集に関わられた全ての皆様に御礼申し上げます。

現在では八多町の電話の普及率は一〇〇％ですが、昭和30年頃では一〇％程でした。しかし昭和三五年頃には八多町地域団体加入電話組合が発足します。加入件数は一〇軒程で、電話交換所は現在の五滝会館内にありました。ここに河野さん、高木さん、大西さんと言う三人の娘さんが二四時間交代勤務で勤めていました。夜間に酔っ払って尋ねてくる人もあり、怖い経験もしたようです。

当時の電話は、まず受話器を上げて交換手に呼び出して欲しい相手を告げます。すると交換手は呼び鈴のスイッチを押すのですが、呼び出し音は加入している一〇軒全ての電話機から鳴ります。では自分の所に掛かったと、どうやって判断するのかと言えば、なんと一軒ごとに呼び出し音が違っていたのです。例えばAさん宅は「リーン、リンリン」で、Bさん宅は「リーン、リーン、リーン」と鳴っている訳です。勿論、間違って受話器を上げる人も大変多く、のどかな時代でした。この様なシステムですので電話番号はありませんでした。

その後、昭和四一年頃には農集電話が六〇軒ほどで発足し、電話交換所は丸八蓮果場へと移転してきます。新しい交換器は交換手の不要なものでしたので、交換手三人の二四時間交代勤務もなくなりました。電話番号は「四五・六XXX」で始まるものでした。新しい電話は呼び出し音こそ今の電話と一緒になりましたが、一本の回線を複数の家で使用するので、一軒の家が話をしている間は他の全ての家では電話が使えませんでした。そして受話器を上げれば通話中の音が聞こえました。ですから秘密も何も有たものではありませんでしたおしゃべりの好きな女の子いる組では、ほとんどいつも中でした。このような農集電でしたが、加入費用の安さが力で中々に普及していました

しかしその農集電話も昭四七年ごろには姿を消し、通の電電公社の電話となりますその頃の電話器には黒と緑ありましたが、現在どの位の庭で残っているでしょうか。して今もダイヤルを回してる人は、どれ位いらっしゃるでしょう。人に歴史あり、電器にも歴史ありです。IP電やスカイプを使っている方も、二四時間交代で働いてい交換手のお嬢さん方の苦労思い出してあげてください。

我が町の手作り美術展

美術展実行委員長　岩田　勝

この度、八多・多家良町コミセン主催の「第六回コミセン祭り　美術展」が、二月十七(土)～一八(日)両日多家良中央コミュニティセンターで開催されました。

昨年までは、秋に踊り・カラオケなどとうどん他の屋台を出していましたが天候不順や他の行事と重なり従来の「コミセン祭り」開催は不可能となりました。ただ、「コミセン活動の主たる行事を流しては格好がつかん。何か代わることはできないか?」とのことから、数回併行していた写真展を発展させてはどうだろう?となりました。公民館長さんや協議会長さんを通じて、書・押し絵・切り絵・お宝・盆栽・工作・俳句・手芸　他趣味のサークル活動をされて居る方を頼りに出展募集をしたところ、当初の心配は何処へやら大変多くの出展を頂き嬉しい悲鳴で展示場の確保を心配しなければならなくなりました。八多・多家良保育所、宮井小学校の児童からも沢山の作品を展示していただき活況を呈してくれました。

また、消防署から防災グッズの展示・消火器の使い方訓練なども実施して頂き、近年来襲が予想されている南海沖地震への備えなど考えさせられました。

出展された多くの作品は何れも力作揃いで「あの人こんな芸があったんやなぁー、これすごいなぁー、手間かけとんでぇー等々」あちこちから感嘆の声が聞こえてきました。

新聞の「催し物案内」を見たと、趣味を同じにする方、友達の作品を見せて貰いに来たと遠方より足を運んでくれた方も多く、種から育てた盆栽、般若心経二六〇余文字もう少しで写経が完成なのに字が抜けたとか、山中で小さな花の被写体を探す苦労話等々作品の前で盛り上がり、町民の親睦と交流・再発見ができ意義深い美術展であったと安堵したものです。

手探りの開催で、作品募集や開催の案内など十分な周知が行き届かず、出展出来なかった方の残念がる声、一八(日)が小学校のお別れ遠足と重なった事、中高生や若い方々の観覧が少なかったかな?などと多くの課題も残りました。これらを教訓にして、従来型のコミセンまつりの間に何年かに一度今回の様な美術展も良いものだと思います。既に次期への出展作品に取りかかっておられる方がいるのかも知れません。

最後に、急な依頼にもかかわらず多くの出展をして頂いた方々、夜遅くまで子達の作品展示をして頂いた保育所の先生やコミセンの役員さん、消防分団や駐在さん多くの方々に大変お世話になりました。観覧に足をお運び頂いた多くの町内外の方々にも併せて厚くお礼申し上げます。有難うございました。

如意輪寺平成の大修理

住職　山田戒乗

この度、多家良町の皆様を初め、北は北海道から南は九州まで当山観音様とご縁のある方々に御寄進を頂き、本堂大屋根、大師堂、諸堂、馬堂の屋根替が無事竣工しました。紙面をお借りし、衷心より御礼申し上げます。　当山本堂は寛政七年九月（一七九五年）阿波藩十一代藩主治昭公が今の内陣部分を建立、藩発注のため方形の屋根で柿葺（こけらぶき、ソギの厚いもの）でケヤキ、檜等々の高級な材料に規矩術（堂宮大工の基本形）を越えた技術で手の込んだ細工です。柿葺の寿命が三、四十年故に一度葺替のあとが遺り、明治に入って建立八十年二度目の屋根葺替の時期になりました。

平成十六年は当山の上を十個の台風が通過しました。本堂大屋根に大きな杉の枝が突き刺さりました。梯子をかけ昇っていくと枝によって大穴が空きそこから内部が見えます。大分腐っている様子。別に銅瓦谷部一㎝程が蜂の巣の様に穴が空いているのを発見しました。たまたま今回お世話になった㈱カナメから調査の手紙が来ました。冷やかし半分に明治の人は最先端の銅板だから現代はチタンを考慮しようと調査依頼しました。営業が来て、チタンのメーカー新日鐵の技術者も同行してくれました。が、当山屋根の工事は無理との結論。一方、先の蜂の巣の原因を調べるため、三井金属でと一枚を差し替え送りました。その時差し替えた職人は「もう上がらないで・・」といいます。一ヶ月余りで結果が来ました。原因は化学ではなく物理。即ち毎日の温度変化が百年続いた結果、所謂金属疲労でした。年末の全文連総会に写真を持参し文化庁建造物課の技官に修復方法の意見を聞きました。異口同音に「そのままの形で修復しろ」でした。

平成十八年正月号が当山広報誌「朝念暮念」三百号になりその中で「古くて新しい課題」として大屋根のことを訴えました。その後、三月に総代会で機関決定。皆様に御寄進をお願いすることになりました。

慎重に茅屋根解体　新しい屋根がのぞく

六月茅屋根工事開始、岡山から㈲ゆたか工業が施工。あと宮前建設で解体開始。竹内棟梁が各柱の高低差が大きく食い違うこと発見。山本勝美氏により家曳の技法で水平化しました。屋根正面は銅板葺にした折、柿葺と銅板ではテリぐわいを替える必要が生じ、その面のみ二重構造にならざるを得ませんでした。

竹内秀雄棟梁（文化財木工主任）はその部分に土居桁なる補強材を入れ下部を引き揚げた等々、大工仕事は陰に隠れてしまったが実際は大変な仕事でした。十月二日より銅板作業。道具は簡単だがほとんどが手仕事で進めました。十二月に先述の全文連の総会時、文化庁建造物課の技官は「この葺き方は初めてだ」と。また、今回の銅板職人さんも技官と同じ両者の立場から他に例はないと言います。「銅瓦風縦一文字葺」と名付けました。五月になって「趣意書」が出て、当初から「コーペル銅瓦」とありました。要は全国唯一の葺き方です。銅板葺史上、手打銅瓦葺（江戸時代）から近代銅板が製造されるようになって当山の銅瓦風縦一文字葺、平板にした縦一文字（護摩堂の一面に遺っていた）そして現代の横一文字葺と変遷する歴史的貴重な葺き方のです。

古いものを再現したばかではありません。鬼板等と巴古いものを使いましたが、先の大工仕事、家曳き仕事には新の工夫をし、銅板葺には

一、上質の防水シートを使う

二、銅板の長さを旧百二十㎝から八十㎝と短くし、厚さを三㎜から0、四㎜と厚くし

三、温度変化対策（二十年程から開発された）した葺き方しました。

そして銘すべきは平成十八年は当山に台風が一度も来なったことです。あとの大師堂も暖冬で工事が進みました。「百年後に残そう」が私どもメインテーマですが、誰も確することはできません。願わば地域にこの文章の内容を年後の子孫が「確かに」というように言い伝えていただたいです。